

福德岡ノ場の火山活動解説資料（令和3年9月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

8月13日から15日かけて海底噴火が確認された福德岡ノ場では、その後、噴火は認められないものの、変色水域が確認されるなど、活発な火山活動が継続しています。

福德岡ノ場の周辺海域では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石やバースサージ（横なぐりの噴煙）に警戒してください。また、噴火による浮遊物（軽石等）にも注意が必要です。

令和3年8月16日に噴火警報（周辺海域）を切替えました。その後警報事項に変更はありません。

○ 活動概況（図1～図4）

12日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、噴火は認められなかったものの、周辺には、引き続き、黄緑～黄褐色の変色水域が広く分布していました。また、新島の東北東約2kmの位置において、新たに直径約2kmの独立した黄緑～黄褐色の変色水域が広く分布しており、変色水域を取り囲むように浮遊物も認められました。活発な火山活動が継続していると考えられます。

気象衛星ひまわりの観測では、今期間、噴火活動の活発化や溶岩流出を示唆するような輝度温度¹⁾の変化は認められていません。

なお、その後の調査では、8月13日から15日にかけて、福德岡ノ場から約320km離れた父島の検潮所において、消長を繰り返しながら継続する微弱な潮位変化（福德岡ノ場の噴火に伴うとみられる津波）がみられました。

1) 輝度温度とは、気象衛星で観測された放射エネルギーを観測対象が黒体と仮定して変換した温度のことで、他の温度と区別するためこのように呼ばれています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

今回の火山活動解説資料（令和3年10月分）は令和3年11月9日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、海上自衛隊、海上保安庁及び第三管区海上保安本部のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』を使用しています。



図1 福徳岡ノ場 12日の状況（8月の噴火直後との地形と比較）

上段：8月16日の状況、下段：9月12日の状況

・12日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、噴火は認められなかったものの、新島周辺に黄緑～黄褐色の変色水域が広く分布していました。また、8月13日の噴火で形成された新島のうち東側は海没していました。



図2 福徳岡ノ場 12日の状況

・12日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、新島の東北東約2kmの位置において、新たに直径約2kmの独立した黄緑～黄褐色の変色水域が広く分布しており、変色水域を取り囲むように浮遊物も認められました。

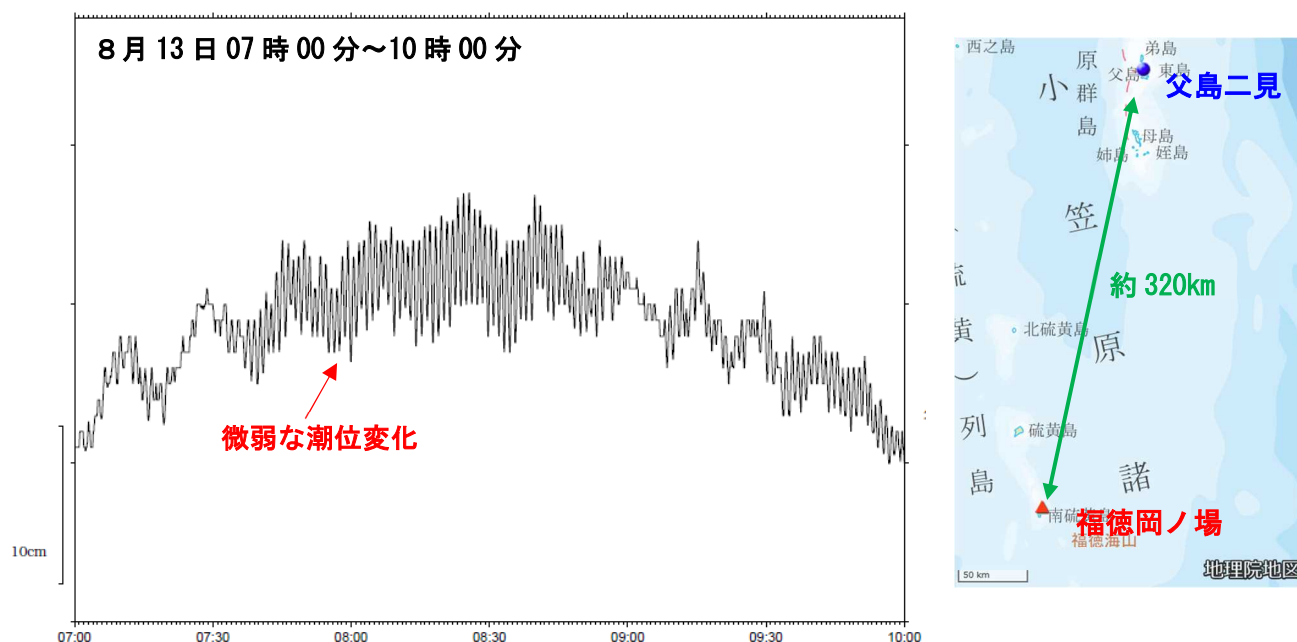


図3 福徳岡ノ場 父島で観測された潮位変化（秒値、天文潮位未補正）

・8月13日から15日にかけて、福徳岡ノ場から約320km離れた父島の「父島二見」検潮所において、消長を繰り返しながら継続する微弱な潮位変化（福徳岡ノ場の噴火に伴うとみられる津波）がみられました。

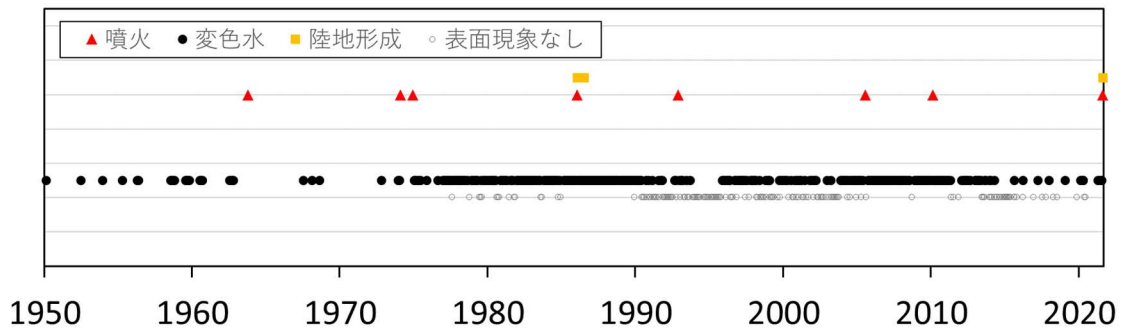


図4 福徳岡ノ場 1950年以降の活動状況

シンボルがあるタイミングで観測が行われています。●は変色水域が認められた観測、○は変色水域が認められなかった観測、■は陸地が確認された観測、▲は噴火が認められた観測を示します。

海上保安庁、第三管区海上保安本部、海上自衛隊、気象庁、漁船及び報道機関等の観測による。

- ・ 8月13日に海底噴火が確認された福徳岡ノ場では、過去にも数年間隔で海底噴火が確認されています。
- ・ 1986年の噴火では長径600mの新島が形成されましたが、噴火終了後海食によって消滅しています。
- ・ 2010年2月3日に小規模な海底噴火、浮遊物、変色水域が認められた後も、長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が断続的に認められていました。

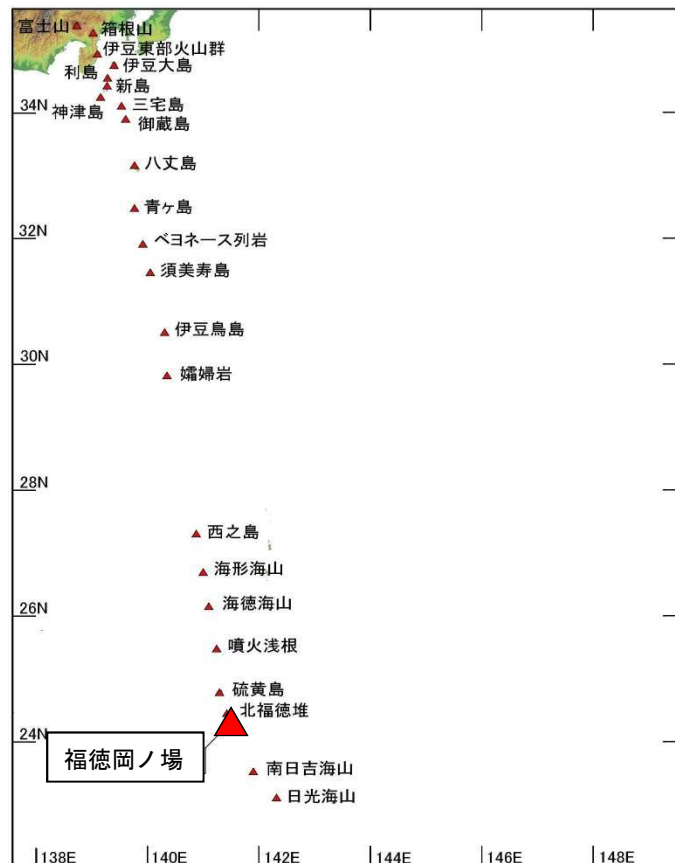


図5 福徳岡ノ場 伊豆・小笠原諸島の活火山分布と福徳岡ノ場

地図は、日本活火山総覧（第4版）から引用。